

1 東北は遠く 被災地は広い

長い道のり

車で東北に行くのは始めて、車の遠出は得意だと思っていた。
横浜ー塩尻(長野県)間は100回以上往復している。
でも桁が違う。

ドライバー2人ずつの交代制でもうんざりするほど長い道のり、行きは11時間、帰りは10時間、休み休みとはいえ、日本は広く東北は遠い。

平安時代に藤原経清はこの道を京都の朝廷まで行き来する。
こんなに遠い地をも支配下に置こうとした朝廷。私にとっては想定外(?)

一緒に行ったカメラマン達は、1台1人ドライバー、彼らの体力と根性には人間離れした何かを感じる。

爪あとの広さ

Google earth で見てみると三陸海岸の平地はものすごく小さい。
津波の爪あともこんなにも狭く見えるんだと驚く。

でもその場に立ってみると、とても広い。瓦礫の山は永遠と続く、そして振り向くと少しだけ高台に建つ家が何にも無かったように建っている。日常と非日常が線を引いたように分かれている。

大船渡市に入って、海が近づいて来た時、心のシャッターを閉じた。
これから見るだろう事実を受入れられるほど自分に自信が無かった。
子どもが無意識でするように心のシャッター越しに瓦礫の街を見ていた。
私がショックを受けたからって、何も役に立ちほしない。一生懸命言い聞かせてみる。

シャッターを開けて見れたのは次の日の朝だった。
景色がぜんぜん違って見えて、引き込まれそうになり、目を閉じてしまった。

このチームのリーダー岩木氏は、「悲しかったら泣けばいい」と言ってくれた。

現地に行く事

今でも現地の写真を見るとうっとなる。
一人でも多くの人が現地に行って東北の今を見たらいい。

映像だけでは時間がたつとだんだん風化してしまう。

長く長くかかる支援だから、東北の復興は次の世代に残す私たちの仕事だから、忘れないためにショックを受ける必要があるんだ。ちょっと自己弁護してみる。

美しい東北

初日大船渡市での待ち合わせまで時間があつたので、何かに誘われるように碓石海岸に行った。
荒れた道路を進んでいくと、美しい景色と海がそこにあつた。海鷗がたくさん日向ぼっこをしていた。
波がどどーん、どどーんと崖にぶつかって白い波しぶきをあげる。
美しい東北の自然を見た。

「ここには津波は来なかったの？」E子ちゃん
岩木氏の「津波で被害を受けたのは人間と人間の作ったもの」との言葉を思い出す。

瓦礫

50日も立つのに瓦礫の撤去はまったくされていない。
行方不明者の捜索だけでもこれだけ広い場所を探すのは大変な事だろう 瓦礫の撤去は地方自治体の仕事らしい(これは後ほど勘違いだと判明)

瓦礫撤去のための重機が見当たらない、流されてつぶれた重機だけがその姿をさらしている。
これを毎日見て過ごさなければならぬのはどんなにつらいだろう。
誰がどのくらい時間をかければ、この瓦礫の撤去は終わるのだろう。

街によって津波の被害がまったく違う 同じ大船渡市内でも谷が違っていると異なる様子。
(長野県人は谷と呼ぶが海沿いの人は何て呼ぶのだろう)

大きな谷違いの陸前高田はまったく違った津波の跡だった。
瓦礫が無い、撤去したのではなく、津波が全部上流に押し上げてしまったのだ。
ただただ広い土台だけが残った街。
復興 復興と言うけれど、この広い土地のどこから手をつけていくのだろう。
瓦礫だらけの街も、土台だけの街も・・

2 支援と炊き出し

炊き出し隊リーダーになったわけ

今回、TSTSTというチームの一員で東北へ旅立った。報告ブログが完成しているのでそちらもよろしく!
リーダーが私のデータ講座の師匠、カメラマンの岩木登氏。(実は渋谷ののんべい横町仲間)
TSTSTの4月活動報告を聞きに行った時、岩木氏の一言で行くと決めた。
残念な事にその大事な一言は忘れてしまった。

見て来よう そして伝えよう
そして、その話をした友人達が次々と一緒に参加することに、一緒に見て来ようそして伝えよう

支援品を集めるためにまずは自分の会社に掛け合ったところ、ナンが1000枚とお汁粉の250人分の材料が手に入った。
嬉しい反面、これを届けられるのだろうか？ 必要としてくれるのだろうか？ 安全に美味しく食べてもらえる準備が出来るのだろうか？
飲食業界に所属する私はTSTSTの今回の目的とは少し違った支援物資を大量にゲットしてしまったため、炊き出し隊長になった。

もともとTSTSTは美味しいコーヒーを提供してホッとしてもらったり、話をしたり、小規模の避難所や自宅で避難生活を送る人に細かな支援物資の提供が目的で、大掛かりな炊き出しなどするはずではなかったから、一時チームのお荷物的な存在になってしまった。

しかし炊き出し隊長となったからには、出来るだけのことはやりたいと思った。
気の毒なのはわたしの声をかけたメンバー4名、何の選択権も無く、炊き出し隊と位置づけられてしまった。
本当にごめんね！

出発前の状況

TSTSTは4月に第1回目の支援の状況から、ある程度の地域が決まっていたし、仙台のメンバーもいて現地との事前連絡や打ち合わせをしてくれた。
しかし、どんな状況で何が出来るのかを伝えられないまま、炊き出しに関しては受け入れ先が決まらずに出発する事になった。

イベントには進行表と役割分担表が必須、しかし現地の状況が分からないと作れる資料はマニュアルぐらい。
出発日にスケジュール表を作ったが、出発時間と現地集合時間と場所が入っただけで後は真っ白。

迷惑になるんだったら全部持ち帰ってもいいじゃない！
受入れられなくても、私たちが出来る事が無くて、ここまでやろうとして準備しただけで100点。
支援してくれた人には力不足だったとお詫びすればいい。
喜ばれる事、役に立つ事意外はやってきてはいけない。

チームのメンバーもその気持ちを共有できる人と出来ない人、それぞれみんな違う。
出発の時S嬢が「やる事無かったら東北観光して来よう」と素敵な一言

実現できた喜び

行ってみたら4箇所での炊き出しが実現。東北の中ではほんの一部の人たちだったけど、喜んでいただいた。
何かを求めていたわけではないけれど、喜んでもらえるとうごく嬉しかった。
喜んでもらえる事が出来た事が幸せだった。
今日の夕飯は冷たくて固いおにぎりだとか、お昼はいつも菓子パン一つだとか、温かいコーヒー、お汁粉、温めたナンにカレー、美味しいと言ってもらえる理由がちょっと辛い。
事前にどうして受け入れ先が決まらなかったらうか。
現地で避難所を訪れると、「いつ来てください。何が出来ますか？」とすぐに決まる。
今まで来るといって来なかった炊き出し隊も多かったらしい。
事前に連絡して冷たくされるのは理由があったんだ。責任を果たせない人は声を上げてはいけない。

支援は身の丈を良く認識する必要がある。

3 私の体験した事、出来なかった事、そして私の小さな思い

実現できなかった街

炊き出しや支援物資が全ての地域で喜んで受入れてもらったわけではない。
事前に連絡を取って、炊き出しや支援の交渉をした仙台のメンバーはとても嫌な思いも数々したらしい。
陸前高田ある公民館に炊き出しの打ち合わせに行った時、私たちを出迎えた人たちの目を忘れる事が出来ない。
明らかに歓迎されていない。

根こそぎ波にさらわれてしまった街のその周りの高台にぽつぽつと集落がある。
その集落の公民館の前には老若男性達が5.6人座り込んでいた。

要人が来る度に借り出され、メディアにさらされ、必要以上の支援物資が山のように送られてきて家に入りきらない。
自分達は49日も終わったんだから、自立したいんだ、炊き出しも支援物資もいらない。
もっと必要としているところに行きあげて欲しい、怒りとも悲しみとも言えない内側から搾り出すような思いを、長老が私たちを気遣いながら静かに語ってくれた。

私は頭が真っ白になってしまった。それに対してどう考えていいのかわからなかったけれど、一緒に行った土川さんがこの時の感想をこう表現した。
「ただ物資を運んで炊き出しを行うのではない、新しく復興の道を見つけることにつながる支援というのは、非常に難しいということをつくづく感じました」
この出来事は土川さんのfacebookの報告書にとってもわかりやすく書いてあるので読んでください。

体験した事、出会った事、人それぞれ思うことは違うけれど、私は今回のようにどう考えてよいか分からない事や、これからどうしていいのかわからない事が多かった。
大人なのに、情けないと思う一方、もしかして菅さんも？と失礼な事を考えてしまう

考えられる人、想像できる人がもっと現地に行かないと・・・(これを読んだ皆さんだったり?)
現地を見て発信して！

見えなかったこと

今回は炊き出しチームで現地の人と直接の触れ合う時間があまりなかった。
3箇所4つの避難所を訪れたけれど、本当に短い時間だったから、何も語れない。
環境の良い悪いの違いはあっても、見た限り(想像していた通り)大人でも避難所の環境は決して楽じゃない。

その中で高齢者や子どもたちはどんななんだろう。
ストレスからハイテンションの子ども達がいると専門家が言っていた。
実は「明るく元気な子ども達」の一部は、SOSを発信しているのかもしれない。

そして、引きこもりや不登校の子どもたちが避難所の中でどんな思いをしているのだろうか。
障がいのある人たちとその家族は避難所の中で肩身の狭い思いをしているのじゃないだろうか、まったく出会えなかったそんな人たちのことを考えてしまう

それぞれの支援団体が現地に行っているが、たくさんの人たちの中で探す事は難しいらしい。

全ての人たちが一日も早く人間らしい暮らしに戻れますように。

実際に行<事

現地に行<事を決めて、友人を誘って、仕事の合間に準備に明け暮れて(+飲んだくれていて)、迎えた寝不足の前日、どうしてこんな大変な事をやるって言ってしまったんだろうと思った。役に立つどころか、迷惑になっててしまうんじゃないかと、自信が無かったし、なんだか不安で結婚式の前日の花嫁のようだった。(う〜ん無理があるかなあ)
そして、帰ってきた時、そう思ったことを忘れないでいようと思った。

行ってみてよかった。

何も出来なくても行<事が大きいことだった。

自分が感じている壁は超えてみると壁ではなく、自分の側にあった戸惑いだった。

自分達が出来る事は少ないけれど、自分達が得るものは多い。

みなさん今度一緒に行きましょう!

語り継ぐこと

東北で明治29年と昭和8年の三陸海岸大津波の体験が語り継がれていないわけは無かったはずなのに、みんな想定外だと声高に言い切った。(三陸海岸大津波 吉村昭著 文春文庫 是非読んでみてください)

スマトラ沖の地震の時の津波の被害を見て、津波に慣れてない国の人にどうして教えてあげられなかったのかと思った。

これだけ映像の時代だから、今までとは違うはず、後世に残るはず、そう願わずにられない。

今だけじゃなく、10年後20年後ではなく、50年後100年後そんな単位でこの映像が配信される事を心より望みます。



photo by Toru Konishi





(C) Noboru Iwaki



(C) Noboru Iwaki

photo by Noboru Iwaki

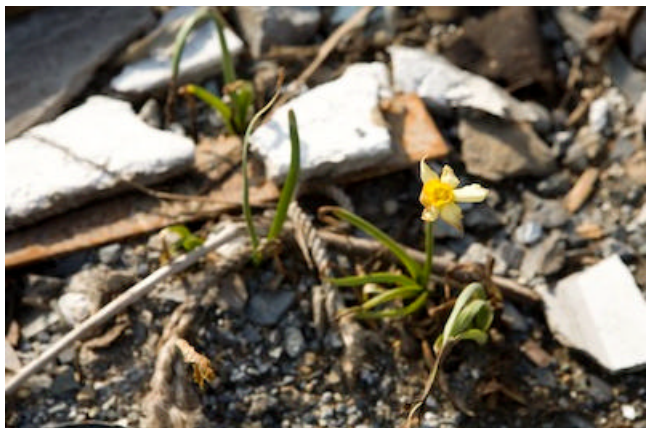


photo by Noboru Iwaki / Toru Konishi / Takashi Kojyo